



静脩

1986年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 23, No. 2

昭和61年8月24日から29日まで国際図書館連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions : IFLA) の大会が東京で開かれた。

このIFLAというのは、1927年に図書館人の国際組織としてエジンバラで創設されたもので、現在本部はオランダのハーグにある。IFLA大会はこれまで欧米各国の持ち廻りで毎年開かれてきた。1980年になって欧米以外では初めての大会がマニラで行われたが、今回のIFLA東京大会はIFLA 60年の歴史上、アジアで二番目の大会ということになる。

大会は「21世紀の図書館」をメインテーマとし、さらに「ニューメディアの影響」、「図書館サービスの变化」、「情報利用における国際協力」など10項目をサブテーマとして取り上げ、「史上最多の63カ国、約2,000人」(8月30日付、朝日新聞)の参加者が、41分科会に分かれて、世界の図書館という視点から図書館の活性化について意見交換を行い、発表された論文は180、うち日本人の論文は約50ということである。

このような規模の大きさもさることながら、今回のIFLA東京大会の最大の意義は何といっても日本で初めて開催されたということであろう。このことはアジア・アフリカ諸国からの参加が全体の三分の一と『異例の多数を占めた』という新聞報道にも表れているが、一方、日本人参加者側からみてもこの大会を通じて各国のたくさんの図書館人との交流の様態を伝聞し、また、そこで生まれた外国の人達との人の輪をさらに国内でのサークル作りまで発展させている例をみるにつけてIFLA東京大会がわが国図書館人に与えた刺激は決して小さいものではなかったと評価される。

本学の図書館関係者からも何名か参加されたが、これを機会にIFLA特集を組んだ次第である。

イフラ(国際図書館連盟)東京大会に出席して

東南アジア研究センター 北 野 康 子

マニラ大会(1980年)以後の日本の図書館界にとって、「IFLA まであと〇〇日」というのが、スローガンみたいなものだったから、マスコミで、東京大会の成功が伝えられると、組織委員会はじめ、関係者はほっとされたと思う。高い参加費であったが、円高の日本へ来てくれた外国人の

事を考えて我慢する。8月21日、22日のプレコン(24日からの本会議の前にいくつかのセミナーが催された。このセミナー期間をさす)から28日のツアーまで、仕事の関係上、アジア、東南アジアに関するプログラムが中心となった。

8月24日(日) 登録。

プレコンの後、横浜の友人宅に泊ったので、東京へ戻って登録のみ。富士山のマーク入りのバッグを貰う。プログラムを取り出してスケジュールを組む。同じ時間帯に興味のある分科会が重なるのがある。

8月25日(月) 部会。開会式。全体会議。歓迎レセプション。

会場で、記念切手を先ず買う。今年のクリスマス・カード用にする。仏教大学や、京都と大阪のアメリカン・センターの人達の顔を見る。午前中書誌調整部会に出席。田辺広氏と、マレーシアの Wijasuriya 氏の発表を聞く。ここは、同時通訳。仏教大学の人達と昼食後、歩いて開会式場の国立劇場へ行く。2, 3分遅れたので、もう雅楽が始まっていた。皇太子殿下夫妻着席。壇上のスピーチは、予定より早く進行し、全体会議となる。シンガポールの国立図書館長の Mrs. Anuar を初めて見た。いつも Exchange List を送って来る所だ。会場が満員で、1日のみの参加者は入れなかったそうで、気の毒だった。

次のレセプションの会場、ホテル・ニュー・オータニまでぞろぞろ歩く。途中、プレコンの発表者の1人だった、マレーシアの著名なライブラリアン、Lim Huck Tee 氏と話をした。もう1人のマレーシアの人は、東京が暑いと参っている。汗まみれになって気持が悪いらしい。この大会には早く申込み、自費で支払ったのに、JTB は高いホテルしか教えてくれなかったと言う。私は安い所に泊っていますと言う。彼は、暑い暑いと繰り返し、ホテルへ着くと、Gentlemen を探してダッシュした。国立劇場の出席者が、どっとホテルに着いたので、クロークの前にずらりと行列ができた。ここは、冷房がよく効いていないのでとても暑い。あのマレーシア人は、また Gentlemen へ戻るのではないかと心配した。やっとバッグを預けて、「鶴の間」に入る。1000個以上の同じバッグを預かったに違いないクロークに同情する。この数では、さしもの大広間も満員となる。料理を前に、マイクの調子が悪くて、ゲー会長や鈴木知事の話は聞こえない。日本のテクノロジーはどうしたか。料理はおいしかった。パパイヤのような

高価な果物も出た。桃もおいしい季節である。参加費4万2千円を取り戻すべく人々が殺到した筈であるが、結構満足したのは、量もあったに違いない。タイの女性に「そば」を取ってあげた。一口の後の顔つきでは、気に入っては貰えなかった。それでも、「すし」の板前の前にこれだけ外国人も列を作るようになった。フィリピン大学のライブラリー・スクールのディーンである Mrs. Vallejo と、2年程前の東京の東洋学会で会って以来出会う。タイのチュラロンコン大学のライブラリー・スクールのディーン、Dr. Minaikit とも話をする。この人も女性。今回はシンガポールの Anuar 館長のみ出席だったが、タイとインドネシアの国立図書館も、女性の館長である。

8月26日(火) 分科会。Asian Night。

午前中は、アジア・オセアニア地域活動分科会出席。ここは逐次通訳。マレーシア国立図書館の Wijasuriya 氏と、マレーシア・ゴム研究所の Soosai 氏および私の属する「アジア資料懇話会」の代表幹事である金子量重氏の発表。Soosai 氏は、IFLA のアジア代表としての15年間の地位を辞される事になった。拍手をして労をねぎらう。Soosai 氏から AFLA (Asian Federation of Library Associations) の提案がある。資金や援助が必要である。そういうお金は出せない。オーストラリアの人が、きっぱり言う。金子氏が発言される。お金が無くてもできることから始めようではないか。図書館の南北問題となってしまった。南の人達にとって、東京へ来るのがいかに大変であるか。かと言って、日本は金の成る木でもない。結論は出ない。昼食は、青山学院の食堂で、ハワイ大学で仕事をしている日本人と。彼女とは、プレコンで出会って、よくいっしょに食事をした。午後は、先ず書誌分科会。アメリカ人と、マレーシアの Lim 氏。彼は、プレコンの他にここでも発表。次に、情報技術分科会。21日と22日のプレコンのまとめと、東芝の人の光ディスクについて。

宿に戻って、インドネシアのバティックで作った服に着替えた。レセプションは「平服」と書いてあったので、今度しか着る機会がない。せっか

く持って来たのに。「アジア資料懇話会」の東京の人達が、Asian Nightを開こうと準備して下さった。近くの南青山会館に、アジア諸国の人達が集まった。食べたり、歌ったり、お土産品をあげたりして、9時頃まで過した。国際交流委員長の今まど子教授も来て下さった。

8月27日(水) 分科会。展示会。

Japan Night。

午前中は2回目の地域分科会。マレーシアとタイの女性2人の発表。いずれも機械化の問題。発展途上国の適正技術にも関係がある。この後で急いでホテル・ニュー・オータニへ行って、まだ見ていない展示を見る。Kraus Reprintの人から部厚いカタログを貰う。この会場は最終日なので、IFLAのマーク入りの記念品が安くなっている。職場の人への記念に、ペーパー・マークをたくさん買う。青山会場は、まだ同じ値段である。東京の人にホテルの食堂で、昼食をごちそうになる。また青山学院へ戻って、「書誌とアジア研究」というテーマの書誌分科会に出席。3人の発表が代読で驚いた。先ず、ソ連の人が、ロシア語のペーパーを読んだ。出席者は、英語か日本語を読んでいる。英語の質問が出る。通訳無しなので、ソ連からの出席者らしい人が通訳して、やっと代読の人に意味が通じる。ヤヤコシイ。2番目は中国人。これも代読。ただし英語。3番目の、アジアに関するPh.D.論文についての発表者、アメリカ人のShulman氏は、「Doctoral Dissertations on Asia」の編集者である。この人の発表が聞きたかったのだが。この後、CONSALという所に出席。フィリピン大学のVallejo教授が、来年2月にマニラで開かれるCONSAL (Congress of Southeast Asian Librarians) についての紹介をされた。ここは論文の発表は無し。Anuar 館長のCONSALについての発表は、ここの方が良かったのでは。少人数だったので、入って来たカメラウーマンに何枚も写真が撮られた。最後の日に、アジアの人達の写っている写真を10枚ばかり買った。後日、Asian Nightの分もいっしょに国別に送ってあげたら、とても喜ばれた。

外国人にどんなものを見せるか、野次馬根性で

Japan Nightに行った。ホスト側だから、隅の方で遠慮して観た。東京へ来る国際会議の参加者は、自動的にここへ送り込まれるのか。パッケージでないと高くつくであろうけど。ファッション・ショー。日本のデザイナーさん、ヨーロッパでがんばってますから。日本の女性は、あんなに颯爽とは歩きませんね。狂言の「棒縛り」は分かりやすかったと思う。酒呑の話は万国共通だから。「鼓童」の太鼓は好評だったようだ。日本の伝統芸術は、デリケートでシブくてと思っていた人には、あのダイナミズムは意外であったろう。

8月28日(木) 国立国会図書館見学。

アジア資料課の人が、特に案内して下さいと言われるので、仏教大学の人と2人で行った。新館では、閲覧を委託された人達が、開館を前に、本番の練習をしていた。実際にうまく行くといい。最後に青山会場へ戻って、申込んでおいたペーパーを受取った。後でそのひとつが、1番違いである事に気付いた。事務局に電話したら、正しい分が送られて来た。直ちにであったから感心した。

プレコンの事は、紙面が無いが、CJK (中国語／日本語／韓国語) 等の非ローマ字の機械処理についてであった。東南アジアについて言えば、タイ語や、マレーシアのジャヴィ (翻訳では、ジャワ語となっているが、誤りである)。などでは、ローマ字や、語の区切りの問題など、標準化の問題が大きい。韓国語の他に、日本語や中国語の分かる韓国人の女性が言われた。ローマ字は西洋人のためにあるのではないか。ISBDにはアジアの意見は反映していないのではないか。

ある職業が、専門職であるための条件のひとつとして、その職業の団体の活動や組織力が問われる。1927年以来、52回もの国際会議を開催したというIFLAの活動と組織力は、評価されてもよいと思う。高度情報社会の中で、図書館員に要求される知識や技術は何か、何を学ぶべきかを考えるきっかけに、今回の東京大会がなったことを望みたい。